JCAW

Japan Commerce Association of Washington, D.C., Inc.

会報別冊

ワシントンDC日本商工会会報
号外 ～ Vol. 4 ～

ワシントンおとめ

Vol. 1～Vol. 6

聞き手：袴田奈緒子

- Vol. 1　渡邉　聖子（P. 2）
- Vol. 2　山田　有美（P. 5）
- Vol. 3　平井　玲子（P. 8）
- Vol. 4　日下部　裕美子（P. 11）
- Vol. 5　中原まり（P. 14）
- Vol. 6　竹松　舞（P. 17）

JCAW Copyright © 2012 All Rights Reserved.
会報内すべてのコンテンツの無断転用を禁じます。

1819 L Street N.W., Level 1B, Washington, D.C. 20036 TEL: 202-463-3947 FAX: 202-463-3948 www.jcaw.org

インタビューアー 袴田奈緒子より

中国などの台頭に押され、日本人の勢いがなくなっているというのが最近の通説ですが、ところがどっこい。ワシントンで活躍されている女性たちは皆さんエネルギーがみなぎっています！仕事のこと、プライベートのこと、仰天するような失敗談などびっくり箱をひっくり返したような面白い話が出てくることも多い毎月の取材。スペースの制約からそのすべてを掲載できないのが残念ではありますが、それぞれの道で活躍されている日本人女性の姿を垣間見て頂ければ幸いです。

Vol.1

様々なバックグラウンドの人間をひきつけてきた首都ワシントン。政府機関、企業、国際機関、芸術など幅広い分野で活躍する日本人女性も目立ってきました。このコーナーでは、そんな女性たちをインタビュー形式で取り上げて紹介していきます。第1回は、前月号までの会報で「スポーツ三昧」を執筆して下さったインテレッセ・インターナショナルの渡邉聖子さん。

～略歴～

渡邉　聖子（わたなべ・せいこ）

東京都江戸川区生まれ。幼稚園から高校まで都内の私立女子校に通う。早稲田大学第一文学部（心理学専攻）卒業。アフラックアメリカンファミリー入社、仙台支社に配属。約2年の勤務を経て退社し、渡米。ミズーリ州ウェブスター大学で人事管理（HR）の修士課程を修了。2005年、インテレッセに入社。ワシントンDC事務所の立ち上げ要員として勤務を開始し、現在に至る。

一現在の仕事の内容を教えてください。

「ワシントンDCと近郊（バージニア、メリーランド）で、日本企業や日本政府の関連機関を中心に、派遣スタッフを紹介するのが主な仕事です。アシスタントやリサーチャー、翻訳の依頼が多いですね。派遣スタッフは日本人が約7割、日本語を話す米国人が残り3割。派遣スタッフとして登録を希望するかたの面談や、人材を探している企業の訪問、派遣スタッフのフォロー、契約の締結、人事セミナーへの出席、情報収集など多岐にわたる仕事を2人でこなさなくてはならないため、なかなかの激務です（笑）」

「日系の多くの人材派遣会社は、拠点を大都市に絞り、残りの都市は出張ベースでカバーする形をとっていますが、弊社は中堅都市も含めた全米15ヶ所に小さなオフィスをかまえて対応する『地元密着型』が特徴です。首都ワシントンでも、日本企業のコミュニティーは比較的小さいので、顧客企業を実際に訪問し、各企業さんの社風や立場をつかみやすい環境にあります。そのうえで、お仕事をお探しの方にも登録頂いた後に直接お会いし、履歴書だけでは分からない雰囲気や（ポストの空きがある）会社との相性などを総合的に判断し、人選を決めています」

JCAW Copyright © 2012 All Rights Reserved.
会報内すべてのコンテンツの無断転用を禁じます。

―仕事のやりがいは。

「企業内の人事部での採用担当の仕事では、その会社や（空席がある）ポジションと合うかどうかで、採用するかを判断するため、条件に合致しない場合はお断りせざるをえません。人材派遣会社の場合、ほとんどすべてのかたに、いつかどこかでの天職があるはずで、それを見つけるお手伝いをすることに挑戦とやりがいを感じます。また、派遣したスタッフが実際に勤務を開始し、新しい職場で活躍している様子を見たり聞いたりすると、成長するかわいい子供を見届ける親のように、涙が出るぐらいうれしくなります。特に、派遣する前は『大丈夫かなあ』と心配していたような人がバリバリと働いているのを見るほど嬉しいことはないですね」

―大学卒業後、一度日本で外資系就職会社に就職していますよね。当時からいつか海外に出ようという目標があったのですか。

「まったくありませんでした（笑）。帰国子女だったわけでもなく、留学経験があったわけでもなく、漠然と『英語が話せるようになったらいいな』と考えていた程度でした。『就職氷河期』の真っただ中だったので、就職活動の時期にはとりあえず手当たりしだいに履歴書を送りました。全部で100社ぐらいでしょうか。ただ、OG訪問などをこなしていくうちに、若いうちから責任ある仕事を与えてもらえる外資系企業に関心を持ち始めました。（前月号までの）『スポーツ三昧』の連載でもお分かりになって頂けたかもしれませんが、やり始めたらのめりこむ性格なので（笑）『とりあえず入社後数年間はバリバリ働きたい！』と思っていたものですから」

―アフラックでの経験はどうでしたか。

「アフラックでは仙台支社に配属され、初めての東京以外での生活、初めての一人暮らし、と初めてづくしの社会人スタート。現地の代理店の管轄や営業支援を任されましたが、代理店のかたはたいていが私の親ほどの年齢。最初は『この子はいったい何の役に立ってくれるんだろう』と半信半疑に見られていたと思います。保険の商品や営業面での知識をつけると同時に、地元のお祭りや行事に週末返上で参加したり『ドブ板』的な努力を重ねて、ようやく2年目ぐらいから信頼され始めたような気がします。仕事にも慣れ、地元の方々とも仲良くなり、ごはんもおいしく、本当に毎日が楽しかったです」

―留学を決意したきっかけは何ですか。

「入社後2年が経ち、仙台での生活を満喫していた半面、入社以来手さぐりでやってきたことを体系的に学びたい、と思うようになっていました。組織や人のマネージメントなどを効率化できる理論があるのでは、と考えたのです。とにかく早く勉強したいと思っていたので、1年でHR（人事管理）の修士号が取れる大学を選びました。留学前の段階では、ずっとアメリカに住むつもりはなく、修士号を取り終えたらまたすぐ日本に帰国する計画でした。仙台を離れるにあたり、仲良くなった代理店の人たちから『仙台を捨てていくのか』と言われたりもしましたが、『すぐに帰ってくるから』と泣く泣くお別れをした記憶があります」

―大学院生活はどうでしたか。

「勉強面では、法律面からの人事とリサーチ＆アセスメント（分析・評価）などの授業が勉強になりました。日本の大学での授業と比べて、主体的に発表したり調べないといけなかったり、実社会に基

JCAW Copyright © 2012 All Rights Reserved.
会報内すべてのコンテンツの無断転用を禁じます。

づいたケーススタディーをしたりと、ひとつひとつがすごく新鮮でした。ただ、企業の人事部に勤めながら通う学生が多く、授業も夜が中心。刺激（？）が少ないセントルイス（ミズーリ州）での生活そのものにも退屈してしまい、半年後には限界を感じるほどになっていました。ちょうどその頃、大学の分校がワシントン近郊にあるのを知り、すぐに引っ越しました」

「DCでの生活は本当に楽しくて楽しくて・・・当初1年の予定だった留学期間を（専攻を増やして）1年半に伸ばしましたが、いつのまにか、日本に帰国するというのが想像できないほど、ワシントンでの生活に浸かっていました。『1年で帰る』と宣言していたこともあり、当初、両親にはアメリカにとどまることに強く反対されましたが、アメリカで働くことがいかに自分にとって重要かを熱く語るうち、その熱気に押されたのか、しまいには『そんなにやりたいなら好きなようにしなさい』と諦めてくれました（笑）」

ーワシントンの魅力は何だと思いますか。

「たくさんありすぎて、答えに困りますね（笑）。ニューヨークのように大き過ぎずちょうど良いサイズで、1時間もドライブすると山や海の自然も楽しめるという点が一番気に入っています。たとえば、週末には朝、ポトマック川沿いをランニングして、DCのおしゃれなレストランでブランチを食べ、午後スミソニアン博物館に行き、夜はケネディーセンターでコンサートを楽しむなど、1日のうちにここまでバラエティーに富んだ活動ができる都市はそうそうありませんよね。国際色豊かで、いろいろな国の文化を感じられる点や日本ように四季や桜があるのも好きです」

ーアメリカでの失敗談があれば、聞かせてください。

「何でも体当たりする性格なので（笑）、いくつもの失敗談がありますが、一番怖かったのは、あの世行きかと覚悟を決めた車の大事故です。忘れもしない、05年のメモリアルデーの朝、高速道路を走っていたとき、出口を通り過ぎそうになり、慌ててハンドルを切ったところ、猛スピードで走っている車に接近したため、もっと慌てて急ハンドルを切りました。すると、何と車が片足状態になり、着地した瞬間、車は横向きですでに操作不可能な状態に。後ろ向きのまま、ガードレールに向かって猛突進！突き破って下に落ちるかと思ったら、意外と頑丈なガードレールは車を跳ね返し、今度は高速道路を横断して中央分離帯めがけて突進。また跳ね返され、ついに6車線のど真ん中に横向きで停止。車の前後はペシャンコにつぶれ、生きた心地がしませんでした」

「気が動転した私は、とっさに『渋滞をひきおこしては大変』と考え、そそくさと車から出て『すぐに車を動かしますから！すみません！』と周りの人たちに頭を下げながら、火事場のバカ力で何とか自分ひとりで車を路肩まで押していきました。強運なのか、神様に見守られていたのか分かりませんが、大きな怪我をすることもなく（エアバッグで多少顔を打った程度）、免許停止になることもなく、とりあえず一件落着となりました。これ以降、安全運転を心がけるようになったことは言うまでもありません」

ー今後のキャリアプランは。

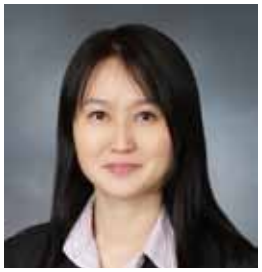
「とことん人事にこだわっていきたいと思っています。これまで米国企業や日本企業での人事を経験してきたので、多種多様な人材が集まる国際機関などでの人事の仕事にいつか挑戦してみたいです。誰が使っても同じ機械などと違い、人はある意味『生モノ』なので、やる気しだいで非常に大きな力を発揮したり、小さな力しか出せなかったりする。自分の頑張り次第でほかの人のポテンシャルを最大限伸ばすこともできる、というのが人事の仕事の醍醐味だと思います。どの組織でも『人こそが組織を強くする基本軸』 だと考えているので、その一助になれればという気持ちもあります」

JCAW Copyright © 2012 All Rights Reserved.
会報内すべてのコンテンツの無断転用を禁じます。

Vol.2

「内向き」傾向を指摘されて久しい日本人ですが、ワシントンで活躍する日本人女性は勢いを増すばかり。そんな女性たちを取り上げるこのコーナー、第2回は弁護士の山田有美さんにご登場頂きます。

～略歴～



山田　有美（やまだ・ありみ）

東京都新宿区生まれ。明治大学大学院中に司法試験に合格し、99年に弁護士として登録。知的財産権関連の案件などを中心に、日本で約5年間、弁護士として働いた後、2004年に渡米しテンプル大学（ペンシルバニア州）ロースクール、ジョージワシントン大学（ワシントンDC）ロースクールで学ぶ。06年、ニューヨーク州司法試験に合格、同州の法律事務所で特許に関する訴訟などを手がける。09年、ワシントンの法律事務所に移り、現在に至る。

—現在の仕事内容を教えてください。

「特許関連の訴訟や特許の出願、見直し（既にある特許を無効にすること）、知的財産権に関連した契約書の作成などを手がけています。電機、自動車など製造業を中心に、アメリカに拠点を持つ日本企業から依頼された案件が中心です」

—米国で弁護士として生きていくうえで難しい点は何ですか。

「契約書の作成一つとっても、自分一人でできるようになるまで非常に大変で、米国で働き始めて5年ほど経った後、ようやく『弁護士』と名乗ることに抵抗を感じなくなりました。日本の弁護士と米国の弁護士はあまりに大きく違うため、それゆえに難しい点が多いです。たとえば、日本では弁護士が顧客開拓のために『営業』することは非常にまれですが、アメリカの弁護士は非常に熱心に『営業』します。自分でクライアントをどんどん開拓していかなくてはいけません」
「特許関連の専門家、つまり弁理士になるには理系のバックグラウンドが必要とされることも米国と日本で大きく違う点で、そのために大変な苦労を強いられました。弁護士資格があれば弁理士として活動できる日本と違い、米国では弁理士の資格が必要で、その試験を受けるには理系の学位があるか、一定数以上の理系の授業の単位を取っておく必要がありました。私は理系のバックグランドがなかったため、米国で弁護士として働きながら、夜大学に通って微積分、物理などの単位を取得しました。フルタイムの弁護士としての仕事と勉強の両立は非常に苦しく、夏休みもなく、友達と遊びに行く時間もなく、社交的には『冬眠状態』でこの間は人生がなかったです（苦笑）」

—ワシントンで弁護士として働く醍醐味は何ですか？

「当初、ニューヨークの法律事務所で特許訴訟をやっていたのですが、訴訟をもっと理解するには、特許出願をやってみたいと思い、2年半前にワシントンに戻ってきて特許出願を専門とする事務所で働き始めました。バージニア州（アレキサンドリア）に特許庁がある関係で、特許庁の審査官との直接面談ができるなど特許出願するのには有利な環境にあります。ただ、今後は訴訟をもっと重点的に手がけたいと思っているので、日本企業との電話会議がやりやすい米国西海岸に移ることもありえると思っています」

JCAW Copyright © 2012 All Rights Reserved.
会報内すべてのコンテンツの無断転用を禁じます。

—弁護士になろうと思った理由は？

「日本では女性が社会で認められて働くには、資格があった方がよいと感じたことです。司法試験に合格したばかりの頃は、司法試験に合格すれば、その後一切勉強しないでよいと思っていました。これが「大間違い」と気付いたのは司法修習生になってすぐ。弁護士という職業は一生勉強で、法律改正や新しい判例、専門分野に関する勉強を絶えずし続けなければならないと知って、職業の選択を間違ったと思いました。（例えば、特許法や著作権法は司法試験の科目にありません）司法修習中は『弁護士なんかやめたい』といつも言っていましたが、その後は諦めて、何でも貪欲に勉強しています」

—日本でも弁護士として活躍されていたわけですが、渡米したきっかけは？

「理由は大きく2つあります。第一に、日本でもアメリカのようなロースクールを設立し弁護士を大幅に増やすということが決定され、日本の弁護士の資格だけで十分仕事ができた時代は終わりに近づいていると感じたこと。差別化できないと生き残りが難しいと悟ったのです」

「日本で所属していた事務所では、海外案件が扱えなかったため、上司がクライアントに他の事務所を紹介するたびに『いつか自分で海外案件に挑戦したい』と忸怩（じくじ）たる思いで見ていたことも米国に来た理由です。日本の企業同士は、交渉が先に進み、事後に契約書を作成することが多いのに対し、海外企業との交渉だと、まず契約書ありき。契約書作成を任される側としてはやりがいが大きいですね」

—米国の司法試験に挑戦したときの話を聞かせてください。

「ニューヨーク州の司法試験を受験したときは、勉強期間が3ヶ月と限られていました（ロースクールの授業終了が4月末で、司法試験が7月末）。ロースクールが終わる頃には、このまま日本に帰るのではなく、アメリカで1度は就職してみたいと思っていましたが、日本の法律事務所の後ろ盾のない私は司法試験に合格することが唯一の選択肢だったため、崖っぷちに立たされた気持ちで真剣に勉強しました。勉強以外のことはほとんどせず、7月4日の独立記念日に花火を見たのが唯一の息抜きでした。最後の2週間はご飯を食べる時間ですらもったいないと思ったほど。後で考えてみると、日本の司法試験を念頭においていたので、勉強しすぎた気がします（笑）」

—アメリカでの失敗談は？

「アメリカに来ると決めてから、たった2ヶ月でアメリカに来たため、英語の勉強もほとんど出来ずじまい。準備不足がたたり、苦労したこともありました。来たばかりの頃は英語があまり分からなくて、ロースクール教授のオフィスに行って「私はあなたが授業で言っていることがさっぱりわかりません。どうすればいいでしょう？」と直談判（？）しに言ったこともあります。教授が困った顔をして、しばらく気まずい沈黙が流れたことは今でもすごくよく覚えています。現在は他の弁護士と電話で法律問題について話していますが、当時はこういう自分は想像できなかったです」

「アメリカに来たばかりの頃はRの発音ができなくて、自分の名前（Arimi）のスペルを聞かれるたびに、Rを発音できなくていつも困っていました。来たばかりのときは、電話やガス、ケーブルテレビの申し込みなど、スペルを聞かれる場面が非常に多いですよね？電話でケーブルテレビを申し

JCAW Copyright © 2012 All Rights Reserved.
会報内すべてのコンテンツの無断転用を禁じます。

込んだら、郵便が届き、Alimiという名前で登録されていました（笑）。今ではRの発音もかなりよくなり、間違えられることは全くないです」

—今後のキャリア目標は？

「一つ一つの案件を全力でやることと、クライアントに満足して頂けるよう真剣に仕事に取り組むこと、そのために絶えず勉強し続けること、という当たり前のような目標しかありません。あまり高い目標を持つと、息切れしてしまうので、今の自分より少しだけ高い目標を設定して、それを達成し、また少しだけ高い目標を設定してそれを達成してということを繰り返し、あまり先のことまでは考えないようにしようと思っています」

—オフの過ごし方は？

「仕事をするか、最新の判例を読むか、最新判例について原稿を書くか、日本で講義をする準備をするか、たまにゴルフの打ちっぱなしにいくか、ピアノをするか、バイオリンをするか、お酒を飲みに行くかです」

「音楽仲間と音楽を楽しむこともあります。ニューヨークで弁護士をしていたとき、1年間アマチュアオーケストラに入っていました。みんなで音楽を作るオーケストラは、自分がこの音楽の一部だと感じれる点が最高です。指揮者の重要性など、新しい発見もありました。老後の楽しみとして、バイオリンはずっと弾けるようにしておこうと思っています。機会があったら、またオーケストラに入りたいですね」

JCAW Copyright © 2012 All Rights Reserved.
会報内すべてのコンテンツの無断転用を禁じます。

Vol.3

「なでしこジャパン」に負けず劣らずの活躍で、ワシントンでの存在感を高めている日本人女性たち。3回目となる今回は、イベント企画会社、はっぴ・エンタープライズの平井玲子社長にお話を伺いました。

～略歴～

平井　玲子（ひらい・れいこ）

京都府生まれ。高校卒業まで京都で育った後、ケンタッキー州立大学に入学。卒業後、一度日本に帰国するも、半年後に再渡米。IT企業、古着屋、ブライダルサロンなど様々な職場での経験を経て、06年にはっぴ・エンタープライズを一人で設立。ワシントンで開催する日本関連のイベントの企画・運営を手がける。

—現在の仕事内容を教えてください。

「日米協会が主催する『さくらまつり』をはじめ、ワシントンでの日本に関連するイベントの企画・運営や宣伝などを担当します。単に言われたとおりに実行するだけでなく、発注元のコンセプトや目標、目的を理解し、それらの達成に必要となるあらゆる要素を考慮しながら、きちっとした形に仕上げていくことを特徴としています。場合によっては、企画のコンセプトを一緒に考えたり、戦略を練ったりといった段階から参加します。クライアントさんが常に安心してプロジェクトを進められるよう、チームの一員として動くのが私たちの仕事です」

「現在、集中しているのは、来年のさくらまつり100周年にちなんで、ケネディーセンターで実施する予定の、日本人若手クラシック音楽家によるコンサートの企画です。もう一つは、アメリカで活躍する日本人ジャズ・ミュージシャンに焦点をあてたコンサートの企画運営です。参加する音楽家たちは、もはや日本人という枠にとらわれず、本当の国際人としてジャズの世界で活躍しているアーティストばかりです。エンターテイメント系だけでなく、9月には慶応大学の大学院生向けのワシントンでの研修プログラムの運営にも携わりました。平均すると、月2件くらいのペースでイベントを受注しています」

—やりがいを感じるのはどういう時ですか。

「イベントの依頼を受ける際、それぞれのクライアントさんが、目標やビジョンを持っていらっしゃいますが、それらを自分なりに精査した上で、皆が一丸となって様々なアイデアや戦略を出しあいます。そんな苦労の末に生まれたイベントが無事成功した瞬間や、クライアントさんや仲間の笑顔に出会え『「やったね！」と喜びを分かち合える瞬間が大好きです。これはある意味、中毒的にやりがいを感じると言える点ですね』

JCAW Copyright © 2012 All Rights Reserved.
会報内すべてのコンテンツの無断転用を禁じます。

—起業に至った経緯や起業する上での苦労話を教えてください。

「日米協会でボランティアをしていたとき、たまたま『さくらまつり』担当者のポストが急に空き、私にオファーが来たことがありました。さくらまつりは『絶対やりたい！！』と思うイベントであった半面、きちんとした組織でフルタイムの職員として働くことにはどうしても抵抗がありました。悩んだ末に「さくらまつりの担当だけやらせてください！」とお願いしたところ、OKという返事が来たのです。最初は個人として受注しようと思っていましたが、いざイベントの企画を受注するとなると、いろいろと経費がかかる。それなら、自分で会社を持っていたほうが税金上も何かとお得ではないか、と考えて、会社を立ち上げることにしました。」

「『起業しちゃう？』みたいなノリでした（笑）深く考えたわけでもなく、会社名も1日で決めました。日本でイベントというと半被がつき物。アメリカでハッピーというと楽しい感じがする。かつ、エンタープライズとすると、エンタメ以外の仕事もできるだろう。そんな単純な考えで会社をつくってしまいました。。。そんなわけで、起業を考えている人にとっては、アメリカは素晴らしいところです。やる気さえあれば、びっくりするほど簡単に起業できてしまう。起業する上での苦労は、ほとんどなかったです。本当の試練は起業してから実感しましたね。起業は簡単でも、生き残りは非常に難しい。この難しさは今も現在進行形で痛感していますし、毎日自分にはっぱをかけるモティベーションになっています」

—ケンタッキー州の大学を卒業した後、一度は日本で就職しようと思ったのに、結局アメリカに戻ってきたのはどうしてですか。

「私が大学を卒業したのは、日本で就職難が非常に深刻だった時期と重なり、真夏のひどい蒸し暑さの中、人ごみにまみれて就職活動をしていたら、気が滅入り、窮屈に感じるようになってしまいました。ちょうどその頃、人生で初めてのビッグな失恋を経験したこともあり（笑）、ケンタッキーの友達や大自然を想い、まるでハイジのように、ホームシックになっていました」

「そんな時期、派遣通訳の仕事を通して知り合ったアメリカ人の友人に『You should work in US！』と言われたことがきっかけで、日本に戻ってわずか半年後、またアメリカに舞い戻って来ました。『日本でお茶くみするくらいやったら、アメリカで英語でお茶くみしてる方がいい』—そんな単純な理由から、今度はアメリカで就職活動をスタートしました」

—再渡米してから起業するまでの間、様々な仕事を経験されていますね。

「最初は知り合いのツテで、当時立ち上がったばかりのIT企業に就職が決まり、ここから今に至るまで17年のワシントン生活が始まったというわけです。IT企業では社長秘書として働いていましたが、みるみるうちに会社が成長し、多忙になりすぎたことも」あり、次は日本語のフリーペーパーを発行している会社に転職しました。ここでは『フォトジャーナリスト』の仕事をかじったり、メディアの編集の仕事をそれなりに楽しんでいましたが、やがて会社がつぶれてしまい、新聞の広告主の一つだったジョージタウンの古着屋で働くことになりました。人と話すのが好きだし、何か変わったことをやりたかったのでちょうどいいかなと」

「今思うと、この古着屋での7年間がとても勉強になりました。平日の昼間など、お客さんがまったく来ない時間がたくさんありましたが、そんな時、お店の掃除をしながら、『どうやったら、昼間に店を盛り上げられるか？』『お店の新聞でも作ってみようか』などなど、時には『我ながら素晴らしい！』（笑）と思うようなイベントのアイデアが次から次と出てきました。浮かんで来るアイデアを全部書き留める

JCAW Copyright © 2012 All Rights Reserved.
会報内すべてのコンテンツの無断転用を禁じます。

ために買ったノートを『アイデア帳』と名づけましたが、この習慣は今に至るまで続けています。起業について漠然と考えたりもしましたね。当時はまったく真剣ではなかったですが」

「この古着屋が経営不振で閉店してしまい、一応就職活動をもう一度やってみることにしました。今度はワシントンで。グリーンカードを持っていたため、いくつかの日系企業から良い話も頂きましたが、何となく自分のなかでしっくりこなかったのです。『古着屋からコーポレート・ワールドへの転進』というのはやはり無理がありました. . . 。

そして、4ヶ月ほどのプー太郎生活に突入。幸い古着屋時代に小さな家を買っていたので、レンタル出来る部屋は全部レンタルし、とりあえず、毎日生きていけるくらいのお金は工面できました。この期間は、低所得者層の家に食事を配達したり、ホームレスに朝食を作ったりなどありとあらゆるボランティアを経験しました。そんななか、ボランティアで関わっていたさくらまつりの運営を受注することになり、起業に至ったというわけです」

—仕事上の課題は何ですか。

「今まで『はっぴはこういう会社です！』というよりは、お客様が求めることを満たして来た、つまり今ある会社にしてもらった面が大きかったと思います。無我夢中で走って来たので、自社のアイデンティティを改めて見つめなおす時間を作っていなかったからかもしれません。今さらながらではありますが、ようやく社員が2人に増えた良い機会なので、今後は自社のブランディングにも意識的に取り組んで生きたいと思っています。最近お茶を始め、日本独特の『ホスピタリティー』に目覚めたこともあり（笑）、日本人としての良い部分を仕事にも生かせないか、とも考えています」

—ワシントン生活が今年で17年になるそうですが、ワシントン生活での苦労談があれば聞かせてください。

「ワシントン生活で大変だと思った事は、あまりないです。強いて言えば、アメリカのカスタマーサービスの悪さでしょうか。日本と比べて、かなり挑戦的ですよね。ケーブルテレビにしろ何にしろ、何か問題があった時、常に気合いを入れて『やり込められまい！』という意気込みで話さなければ、結局損してしまう。。。大学時代を入れると、アメリカに住んでかれこれ20年以上になりますが、これだけはどうしても慣れないですね。いまだにカスタマーサービスにクレームの電話をする時は、精神は磨り減り、体力も使い、電話が終わるといつもヘトヘトです（笑）」

—逆に、気に入っている点は何ですか。

「一番に挙げたいのは、四季がある事ですね。桜の春、ビーチの夏、紅葉の秋、静寂の冬。どれを取っても心の奥が本当に柔らかくなる感じがします。それぞれの季節を感じる時、思わず思いっきり深呼吸したくなりますし。ワシントンのほどよい大きさ（小ささ）も気に入っています。NYほどゴチャゴチャしているわけでもなく、新しい日本食レストランが出来るとコミュニティーが沸く、そんなこじんまりとした雰囲気が好きです。また、多種多様な国の人が住んでいながら、リトルイタリーやチャイナタウンのように、『国』ごとにあまり分かれておらず、異文化を尊重しあうインターナショナルな町になっている。この点も、とても居心地が良いと感じます」

「また、ワシントンに限りませんが、アメリカの素晴らしい所は、それなりにこだわりを持って生活していたら、どんどん世界が開けるところも素晴らしいですね。私が起業出来てしまう事自体、日本ではなかなかありえない話だと思います。やる気さえあれば、誰でも何とか進んでいけるようなおおらかな風がアメリカには吹いているような気がします」

JCAW Copyright © 2012 All Rights Reserved.
会報内すべてのコンテンツの無断転用を禁じます。

Vol.4

アメリカの首都ワシントンは国内の有力者が集まる「政治の街」であるだけでなく、IMFや世銀グループなど国際機関の集積地でもあります。4回目の今回は、中南米向け開発支援を手がける国際機関、米州開発銀行（IDB）で活躍する日下部裕美子さんにお話を伺いました。

～略歴～

日下部　裕美子（くさかべ・ゆみこ）

アメリカ・コネチカット州生まれ。一時日本に帰国するも、幼稚園時に再び渡米。バージニア州マクリーンで小学3年生まで過ごした帰国子女。1991年東京大学文科二類入学、同年英ロンドン・スクール・オブ・エコノミクス（LSE）に留学。94年、LSEの経済学士を取得。97年、東京大学大学院経済学研究科修士課程修了。同年、ゴールドマン・サックス証券に入社、東京支店の投資銀行部門に勤務。99年、渡米しIDBに入行。中南米諸国の民間企業・金融機関の資金調達支援などの分野で活躍、2年前から財務政策の部署に移り、現在に至る。

—現在の仕事内容を教えてください。

「1999年から米州開発銀行（IDB）というワシントンに本部がある国際機関に勤務しています。IDBは中南米・カリブ諸国の開発援助支援を手がける金融機関で、日本やアメリカを含む47の加盟国政府が出資しています。現在は中南米の最貧国を支援するための無償資金や低利融資のプログラムの策定や、より柔軟に利用できる融資プログラムの仕組みづくりなど、IDB全体の財務政策や金融商品の開発を担当する部署で働いています」

IDB総裁と

「IDBに来た当初は民間セクター部門で、ブラジルの高速道路やアルゼンチンの送電線などインフラ開発向け融資案件の信用リスク分析やモニタリングを担当していました。こういった業務には現地視察が不可欠なのですが、いきなり南米3カ国の出張（アルゼンチン、ブラジル、ウルグアイ）に行くことになった時は、途上国自体初めてだったので、すごく緊張してビクビクしていました（笑）。すぐに慣れましたが。。。その後、ブラジルの貧困地域やメキシコでの再生エネルギー投資を支援したり、スリナムの低所得地区の住宅支援プログラムの立ち上げなどに携わってきました。IDB全体の予算の9割は政府向けですが、ここ10年間で特に伸びているのは残り1割の民間セクター向けローンです。リスクが高くまだ民間金融機関が手を出さない分野にIDBが投資し、それが呼び水となって民間の新たな投資につながり、貧困地域の開発が進むという成功事例が増えてきています」

—現在の仕事についた経緯を教えてください。

「ワシントンに来る前は、ゴールドマン・サックス証券東京支店の投資銀行部門で、主に通信業界の資金調達やM&A（合併・吸収）のアドバイザリー業務を担当していました。NTTドコモの新規株式公開など大型案件に関わることができ、やりがいは大きかったのですが、平日は深夜まで働き、明け方に

JCAW Copyright © 2012 All Rights Reserved.
会報内すべてのコンテンツの無断転用を禁じます。

なることもしばしば。。。週末もなく、家には数時間寝るために帰るだけの『機械』のような生活でした。短距離走をフルマラソンしているような感じで、心身ともに極限まで働く日々を続けていたのですが、そんな私を見かねたのか、当時仕事の関係でワシントンに住んでいた両親が『（アメリカでは）もっと人間らしい生活が出来る』と私に渡米することを勧めてくれました」

「子供のころ、アメリカに住んでいたため、もともと国際的な仕事を希望していました。ゴールドマン・サックスで金融の修行を積みながらいずれは国際機関に応募しようと考えていたため、両親のアドバイスを受け、思い切って転職することにしました。とは言っても、あまりに『機械』のような生活をしていたため、すぐにアメリカで職を探す気にはなれず、渡米当初の5ヶ月ぐらいは『人間』に戻る時間に充てました（苦笑）。お菓子を作ったり、読書をしたりのんびりと過ごし、自分は何をしたいのかみつめるための充電期間として有意義でしたね。楽しかった『のんびり生活』にも飽きてきたころ、ちょうどIDBでの仕事に応募し運よく合格したというわけです」

—金融業界への就職を希望した理由を教えてください。

「投資銀行に就職した経緯は、学生時代にベンチャーにはまっていて、ベンチャーキャピタリストになりたいと思っており、そのためには外資系金融に就職し、金融の専門性を習得するのが最短の道だと思ったからです。投資銀行業界の強いプレーヤーで経験を積み、自分を試したいという気持ちもありました」

「大学院時代は起業家支援サークルを立上げ、起業家を目指す学生とベンチャー企業の社長、投資家、コンサルタントを引き合わせたりするボランティア活動に携わりました。この縁で、シリコンバレーのベンチャーキャピタリストやインターネット草創期の天才的なエンジニアたちに会うこともできました。当時は東大でも他の大学でもベンチャーを目指す人はまだ珍しかったためか、注目を浴びたようで、様々な企業や団体から問い合わせを受け、大変忙しい、でも充実した学生生活を過ごしました」

—現在の仕事でやりがいを感じるのはどういう時ですか。

「自分が主体的に立ち上げた案件がきっかけとなり、その後も民間銀行からの融資が継続的に何度も行われたりして金融市場で評価を受けたときですね。開発効果の面でも、中南米の中小企業、ひいては地域経済のプラスになっていると感じられる瞬間は非常に嬉しいです。リスクが低く収益性が高い大型案件よりも、規模が小さくても社会公共性が高い案件向けの資金調達にとてもやりがいを感じます」

IDB 全体写真

「実際に現場に足を運び、高速道路が建設されたり、融資先の中小企業の生産現場を視察したりすることも大きな刺激になります。会社経営者や担当者と直接話すことでよりニーズに合った資金調達の仕組みを作ることができますから。中南米の融資先の現場の多くは、大型インフラの建設現場です。ヘルメット姿で工事現場を視察したり、地平線一面に続くブラジルのサトウキビ畑を視察したりといった泥臭い体験のすべてが良い思い出であり、貴重な体験です」

—今後のキャリアプランは。

「いろいろな角度で成長していきたいと思っています。IDBでは、財務政策の専門家として、世界経済が低迷しているときでも成長や開発を促進できるような効果的な財務計画を提案できるようになることが一つの目標です。IDBではポジションが空けば自由に挑戦できるので、より戦略的な仕事や興味深い案件に関われるポストがあれば受けてみたいと思っています」

JCAW Copyright © 2012 All Rights Reserved.
会報内すべてのコンテンツの無断転用を禁じます。

「現在の職務以外では、個人的に興味を持っているのが社会的分野での資金調達です。世界の成功事例を調べたり、関係者に聞いた話をサイトに載せたりしながら、将来的には、社会的貢献度が高いプロジェクトのための資金集めに貢献できればいいなと思います。また、最近国際機関を受けたい学生や日本人から話を聞きたいと言われることが多いので、12年間の国際機関での生活で感じたことなどを文章にまとめる作業にも興味があります」

—オフの過ごし方はを教えてください。

「私のオフの大きな目玉（？）の一つが、自ら主催している『Attractive & Interesting People Dinner（AIPD）』という日本人向けの異業種交流会です。元々はいろいろな業界の人たちとのつながりを気軽に作りたいということで始め、参加者それぞれが面白い人を連れてくる、ということだけがルールの気軽な食事会でした。最初は仲間内で始めたのですが、6年たった今、メーリングリストには250人以上が名前を連ね、会合の参加者も50～100人程度と大きく成長しました」

「商社、金融、弁護士、メディア、医者、国際機関、留学生などありとあらゆる人が参加していて、仕事だけでは作れない幅広いネットワークができ、世界が広がりました。少し大規模になりすぎて、最近は運営がとても大変になってきたことも事実で『嬉しい悲鳴』を上げている状態です。。。ただ、東日本大震災の復興支援イベントをこの異業種交流会で実施し、約100人の日本人が参加して下さって、4,000ドルの募金を被災地向けに送金できたことは本当に良い思い出です」

—東京大学を卒業した女性が集まる会がワシントンにあるそうですね。

「東京大学女子卒業生の同窓会として結成された『さつき会』のアメリカでの支部『さつき会アメリカ』（http://satsukiamerica.todai-alumni.jp）が2009年にニューヨークを中心に設立され、そのまた支部であるワシントンの幹事を務めています。ワシントンのさつき会メンバーは20人前後で、主に20～30代。世銀、IMF、IDBなどの国際機関職員、エコノミスト、メディア、商社、研究者など分野は様々です。さつき会アメリカのイベントは本部があるニューヨークで行われることが多く、ワシントンのメンバーでそれほど頻繁に集まっているわけではないのですが、年に2～3回開く食事会では、海外で道を切り開く大変さを分かっている同世代の仲間と話すことで人生勉強になることが多いです。ワシントン生活の共通項や話題も多く、大学時代のサークルなど昔話に花を咲かせることもできる。いろいろな意味で有難い会合だなと感じています」

さつき会

—今後の人生計画は。

「非常にフレキシブルです（笑）。仕事とプライベートの両立がしやすく、緑も多いワシントンは個人的にはとても住みやすい町だと思いますが、もう12年も住んだので、そろそろ新しい土地に移ってもいいし、やはり大好きな日本にはいつか戻りたいという気持ちも強いです。自分にぴったりのやりがいのある仕事が見つかる、あるいは一緒に帰るパートナーがいる、など何かきっかけができれば、意外とすんなり帰国するかもしれません。いずれにしろ、日本と海外を両方楽しめるような生活が理想です」

「海外での数々の貴重な経験を生かして、社会貢献度の高いこともしていきたいです。ずっと長い間仕事で結果を出そうと打ち込んで頑張ってきた年月が長いので、これからはもっと人生の楽しいことにフォーカスして落ち着いて生活したいと思うと同時に、創造性と冒険心、好奇心を持ち続けられる毎日を過ごしたいですね。欲張りすぎでしょうか？（笑）」

JCAW Copyright © 2012 All Rights Reserved.
会報内すべてのコンテンツの無断転用を禁じます。

Vol.5

アメリカの国会議事堂（キャピタル）はホワイトハウスと並ぶワシントンの名所になっていますが、そのすぐ近くにある米国議会図書館（ライブラリー・オブ・コングレス）は知る人ぞ知る、通好みのスポットかもしれません。今回は議会図書館で司書をなさっている中原まりさんにご登場頂きます。雑誌も含め、懐かしい日本の読み物が豊富に揃う議会図書館。皆様も一度行かれてみてはいかがでしょうか。

～略歴～

中原　まり（なかはら・まり）

東京都文京区生まれ。1988年、武蔵工業大学建築学科卒業。90年、東京都立大学大学院工学研究科修士課程を修了（建築学専攻）。94年同博士課程修了（同）、同大学院助手に。96～97年、1年半サバティカル（研究休暇）をとり、米国へ。コロンビア大学建築学部図書館とニューヨーク近代美術館のアーカイブ（公文書館）で研修。その後、日本の大学に戻るものの、2000年にニューヨークへ移住。コロンビア大学のドナルド・キーンセンター、ニューヨーク公共図書館などに勤務。03年、ワシントンに転居、オクタゴン美術館に勤務。07年から現職。09年、カトリック大学大学院（図書館学）修士課程修了。

—現在の仕事の内容を教えてください。

「米国議会図書館のアジア部日本課という部署で司書を務めています。司書の業務は多岐にわたります。どのような書籍を入手すべきかを調査・検討したり、良好な状態で保管するための計画を立てたり、書籍の保管状況を調べて修復が必要な書籍を選別したりといった具合です。週に2回ほど、アジア部閲覧室のレファレンスデスク（利用者相談窓口）の当番に入り、来館者のさまざまな質問やリクエストに対応します」

「議会図書館内での仕事に限らず、外部の司書との交流や北米の日本コレクションの発展に努めることも重要な任務の一つです。たとえば、アジア、日本関係の学術会議に参加して、現在の研究の流れを勉強し、それに基づいて議会図書館でどのような書籍を増やしていったらよいかなどを検討します。近年、重要性が増しているのが、利用者の増加に向けた『アウトリーチ』の活動です。講演会や展覧会など多くの人が興味を持ってくれそうなイベントを企画して、議会図書館の所蔵物を紹介します。例えば来年は東京からワシントンへ桜が寄贈されてからちょうど百年にあたるので、議会図書館内に存在する桜に関する多数の資料を利用した展覧会を企画しています。図書館ももはや『待ち』の姿勢では通用しない時代に突入しており、積極的に来館を促していくことが必要な時代になっているというわけです」

JCAW Copyright © 2012 All Rights Reserved.
会報内すべてのコンテンツの無断転用を禁じます。

—どういうときにやりがいを感じますか？

「議会図書館は職員が約3,500人にものぼる非常に大規模な職場で、仕事が細分化されているという意味では難しい点もありますが、自分のアイデアや心意気次第でスケールの大きな仕事ができることは魅力的ですね。自分の専門性やバックグラウンドをフルに生かした企画を無事やり遂げたときなどは大きな達成感を感じます。日本人であることをいかし、図書館の所蔵物を使って日本の語学や文化を広めていくことができるということにも喜びを感じます」

「議会図書館には30年以上勤務なさっている方が大勢いるので、5年目の私は『ベイビー』にすぎませんが『あなたはまだ若輩だから、そういう提案や企画を持ち上げるべきではない』というような態度をとられたことがないという点も気に入っています。自分の計画を前進させていけるだけの責任感と実行力さえあれば、非常にやりがいを感じることができる職場です」

—仕事上の課題は何ですか？

「私はもともと建築出身で、議会図書館のアジア部日本課が扱っている書籍の専門家というわけではありません。昔、建築関連のアーカイブで仕事をしていたときに比べると『専門性の欠如が（利用客への）サービス低下につながっているのではないか』といつも疑問を抱いています。所蔵物やそれらの内容に精通しているほど、閲覧者によりよいサービスを提供できるわけですから。日本課の蔵書を4年かけて勉強してきましたが、118万点もあるうえ、旧陸海軍の資料など希少価値の高いコレクションすべてに詳しくなるには、まだまだ時間がかかります。今後、自分がどこまで成長していけるか、アジア部日本課に自分がどのような特殊性を持って貢献していけるか、という点が現在の課題だと思います」

—現在の仕事についた経緯を教えてください。

「長いストーリーになります。私はもともと建築の歴史や意匠の専門家です。博士課程の学位論文でアメリカの建築家の研究を主題にしたので、その研究のため、ニューヨークのコロンビア大学や歴史協会を頻繁に訪ね、原資料（図面や建築家が施主に当てた手紙など）にあたることになりました。建築の原資料を見ているうちに、米国では資料をきちんと保存して将来の資産として残しておくという仕組みが確立されていることに感銘を受けました。同時に、日本における建築の原資料の保存状況に疑問を抱くようになり、大学で教鞭をとる傍ら、建築資料の保存問題に関わることになっていったのです。ただ、当時の大学ではそういった活動が教職員の活動としては認められておらず、建築アーカイブがすぐに設立される動きもほとんどありませんでした。96年から1年半、フルブライトの若手研究員奨学金と文化庁の奨学金でアメリカのアーカイブで研修する機会に恵まれたことで、建築アーキヴィスト（司書）になる夢が一段と膨らみました。ちょうどグリーンカード（米国永住権）の抽選に当たったこともあり、環境の整っていなかった日本を離れて、2000年にアメリカへ移住し、司書の道を究めることにしました」

「当初は正式な職もなく、写真家のアシスタントをしたりしていましたが、少しずつ日本の文化や日本語を使う仕事の誘いがかかるようになりました。コロンビア大学のド

JCAW Copyright © 2012 All Rights Reserved.
会報内すべてのコンテンツの無断転用を禁じます。

ナルド・キーン日本文化研究所でプログラム・コーディネーターを勤めたのもその一例です。司書業に就いたのは、ニューヨーク公共図書館でデジタル化のプロジェクト・アシスタントとして採用されたころからです。その後、2003年に初めてのフルタイムの仕事として、ワシントンのアメリカ建築財団から建築コレクションを保存・管理する仕事のオファーを頂きました。5年ほど働きましたが、景気後退のあおりを受け、コレクション自体が閉鎖されることが予想されるようになり、仕事を探していたところ、運よく議会図書館での現在のポジションを見つけ、応募し、採用されたというわけです」

—長期的な今後のキャリアプランをお聞かせください。

「まだ先はあまり見えていませんが、議会図書館の修復部門で働いている夫（アメリカ人）が転職することはまずないので、私もかなり高い確率で議会図書館での仕事を続けていくと思います。ただ、アジア部日本課にとどまるかどうかはわかりません。せっかく巨大な職場にいるので、その醍醐味を経験してみる、というのも司書としての自分の視野を広げる意味で必須だと思うからです」

—ワシントンで気に入っている点は何ですか。

「ワシントニアンの穏やかな気質でしょうか。ニューヨーカーに比べるとみんな親切で、穏やかだと思います。ワシントン近郊（メリーランド州）で購入したコンドミニアムで主人に出会ったのも、ワシントンならではの奇跡と思っています（笑）多くの美術館が入場無料であることも魅力的ですし、緑が多く空が開けている点も大好きです」

「今でこそワシントン生活を満喫している私ですが、東京生まれの東京育ち、同じく大都会のニューヨークで暮らしていたため、当初ワシントンに来ることに対して多少の迷いがあったことも事実です。ニューヨークはレストランや買い物をするお店がたくさんあり、とても魅力的なところでしたが、当時は経済的にも時間的にもニューヨークの素晴らしさを満喫できていたわけではなかった。電車で3時間で行けるワシントンならば問題ないかな、と自分に言い聞かせ、転居を決めたというわけです」

—オフの過ごし方を教えてください。

「2年半前に結婚し、主人と家を購入してからは、家の手入れや庭作業などに追われています。週に2日のお休みでは足りないですね。。。掃除とショッピングであっという間に週末が終わってしまいます。主人の連れ子（犬）がすでに19歳なので、結構手がかかるのですが、子供のようにかわいくて、かなりの時間を彼女と過ごしています。老犬には　長生きしてもらいたいですが、もし彼女が逝ってしまって、ペットのことを心配する必要がなくなったら、主人と海外旅行を楽しみたいね、と話しています。長期的には主人と社交ダンスを習う計画もあります！」

—今後の人生設計は？

「主人が退職するまではワシントンから動くことはまずありません。日本に帰国するかどうか、についてはまだ結論が出ていません。難しい問題ですね。『歳をとったら日本が恋しくなるわよ』とおっしゃるかたが多いですし、自分でも何となく理解できますが、現状ではアメリカを基盤にすることになるのではないかと思っています。最近、ドナルド・キーンさんが日本への永住を決意なさったというニュースを聞きましたが、自分の人生の大半を過ごしたところが自分の『都』になるのではないでしょうか。そうは言っても、私はもちろん、主人も日本が大好きなので、経済的に可能であれば、老後はアメリカと日本で半分ずつ過ごしたいなと考えています」

JCAW Copyright © 2012 All Rights Reserved.
会報内すべてのコンテンツの無断転用を禁じます。

Vol.6

日本でも一世を風靡したドラマ「ER救急救命室」をご覧になった方も多いと思います。まさにあのERに出てくるような救急救命医でありながら、プロのハープ奏者という多彩な才能の持ち主の竹松舞さんにお話を伺いました。。

～略歴～

竹松　舞（たけまつ・まい）

仙台市出身。幼少時に滞在したアメリカでハープと出会い、帰国後ヨセフ・モルナール氏に師事。1991年日本ハープコンクール・ジュニア部門で2位（最年少）。93年同コンクール優勝。96年フランスでの国際ハープコンクール・ジュニア部門で3位。97年「ファイアー・ダンス」でCDデビュー。通算6枚のCDとDVD1枚をリリース。98年、第8回出光音楽賞を受賞。

07年順天堂大学医学部卒業、横須賀米海軍病院で研修。2009年からワシントンDCで救急救命医療の臨床研修中。

—現在の仕事内容を教えてください。

「ワシントンDCにある病院のER（救急救命室）で働いています。お産や虫垂炎、外傷、脳卒中、肺炎などありとあらゆる病気やけがの治療にあたります。シフト制なのでその日によって勤務時間帯が異なりますが、たいていは食事休憩などなく、患者さんを診察し続けています。夜9時から朝7時までの夜勤では、（日により増減はありますが）20人ぐらいの患者さんを担当することになります。平均して週6日の勤務ですが、1、2週間連続で働くことも少なくありません」

「高血圧や糖尿病などの基礎疾患を抱える人が重症な状態でERに来るケースが多く、そういった場合の救急対応と治療、原因究明はとても緊張感を伴う仕事です。運び込まれた時点で患者さんのカルテがあるわけではなく、あるのは目の前にいるしゃべれる状態にない患者さんの体だけといった状況で、その人に何が起きているのかを判断し、治療を開始しなければいけないといった事態も頻繁に起こります」

—数多くある医師の専門領域のなかからERを選んだ理由は？

「1つの科にとどまらず、小児科、外科、産婦人科、老年期医療まですべてを担当できるバラエティーの広さに魅力を感じました。入院中の旦那さんのお見舞い中に股関節が外れてしまったおばあさんの関節の修復や包丁で手を切ってしまった主婦の傷の縫合、銃で撃たれた少年の治療、駐車場で今にも生まれそうな赤ちゃんのお産など非常に幅広い分野です」

「ERは夜間や緊急で運ばれてくるすべての患者さんの窓口で、その人たちの予後がかかっている場所でもあるため、非常にやりがいがあるなあと。また、医者として必要なスキルを学ぶにはERが最適だと考えたことも理由の1つです。どんな患者さんが来ても怖くなくなる度胸をつけるにはぴったりの職場だと思いました。実際に、ERは全く予想できないことの連続で、変化にとんだびっくり箱のような世界なんです」

—ワシントンで仕事をすることになった経緯は。

「4歳から6歳まで医師であった父の仕事の関係で、米ミシガン州（アナーバー）に住んでいたため、米

JCAW Copyright © 2012 All Rights Reserved.
会報内すべてのコンテンツの無断転用を禁じます。

国に対する単純な憧れというものはありませんでした。ただ、医学部在学中、ハーバード大学に研究に来て、医師を育てるための教育水準の高さを目の当たりにし『ここで働けばいい修行になるのではないか』とアメリカで自分を試してみたい気持ちが芽生えました。卒業後はまず研修先として、横須賀の米軍基地にある米海軍病院を選びました。公用語は英語、使う薬も治療方針もすべてアメリカ仕様のこの病院ですべての科を回り、実践でのスキルを習得しつつ、その間にアメリカの医師国家試験に合格しました」

「勤務先の病院が決まるプロセスは外国人用の別枠があるわけではなく、アメリカの医学生に混じって希望の病院のポストを取り合います。医師国家試験に合格した後、行きたい病院に申込み書類を送り、書類選考を経て、数十分の一の確率で面接に呼んでもらうことができ、面接後、各病院は申請してきた医者の卵たちをランク付けし、行きたい病院の上位に自分がランク付けされていてば採用されるという仕組みです。他の都市も含め、いくつかの病院を訪ねましたが、ERの規模の大きさや先輩医師たちの雰囲気の良さなどから現在の病院（Washington Hospital Center/Georgetown University Hospital）に決めました」

—ERの仕事で特に大変な点は何ですか。

「やはり体調管理でしょうか。日勤、夜勤が交互にやってくるので体内時計の管理が非常に難しいです。生死がかかっている患者さんが数多く運ばれてくるERではとにかくスピード勝負。寝不足だからと言ってぼーっとすることは許されません。すでに手一杯の状態のときでも容赦なく次々と急患が運ばれてくることもあり、すべてが予測不能なところもERの難しさの一つです」

「ERの治療は本当に日進月歩なので、教科書に書いてあることだけでは到底対応できません。最新の症例などを扱った論文などでせっせと勉強する必要があります。毎月、症例発表会などで先輩医師の前でプレゼンテーションしなくてはいけなかったり、医学生に講義したりとERのシフト勤務以外にやらなくてはいけないことが山ほどあり、本当に休む暇がありません。1日24時間ではまったく足りないと切に思います（笑）」

—医師として働くうえで、ワシントンならではの特徴はありますか。

「オバマ大統領やファーストファミリーが万が一のときに診察を受ける体制ができているかチェックするため、シークレットサービスの人が来ることもあります。私たちの指導医が働いているホワイトハウスに行って、ホワイトハウスの医師たちと情報交換をする機会もあります」

「DCはHIV患者の率が非常に高いので、その関連の疾患で訪れる患者が多いですし、ホームレスが宿を求めてスーツケース持参で来ることもあります。また、DCだけではないのですが、アメリカでは『drug-seeking』といって、強い薬を求めて病院に来る人がかなり多いです。こちらの治療では鎮痛目的などのために麻薬系（モルヒネ系）の薬をごく当たり前に使うので、薬物中毒の人がそういった薬や注射欲しさにERに来るというわけです。ときには『強者』がいて、『ほかの薬にはすべてアレルギーがある』と語り、ピンポイントで麻薬系の薬を指定してくる人もいます。痛がる芝居をして薬をもらいに来る人も。病院にはこういった人のブラックリストがあり、要注意人物としてカルテにメモ書きされています」

—今後のキャリアプランは。

「2009年夏から勤務している現在の病院でのプログラムは今年の夏に終わります。そのあとは、ERのなかの専門分野である毒物学の研修をするため、ニューヨークの病院に移る予定です。毒物学は聞こえがものものしいかもしれませんが、あらゆる薬の中毒症状などを中心に、サリン・一酸化炭素中毒、あらゆる常用薬物などを扱うもので、専門的に勉強すれば、普段みている症状や薬がより深く理解でき、ひいては医学全般ももっとよく分かるようになるのではと思います。NYでの研修は2年間の予定です。そのあとはアメリカで続けるか日本に帰るか、まだはっきりとは決めていません。ただ、日本には医

JCAW Copyright © 2012 All Rights Reserved.
会報内すべてのコンテンツの無断転用を禁じます。

学と直結した毒物センターが存在しないので、その分野の認識を広める一助になりたいという気持ちはあります」

—オフの過ごし方を教えてください。

「毎月の病院での症例発表会や医師向けのレクチャー、医学生への講義の準備、論文の書き上げなどに追われていることが多いです。土日が休みになることが少ないため、友達ともなかなか会うことができないのが難点ですね。非常にストイックな生活をしていると思います（笑）」

—プロのハープ奏者でもいらっしゃいますが、ハープを始めたきっかけを教えてください。

「アメリカ滞在中の幼少期に初めてハープの存在を知りました。3歳から弾いていたピアノより更にやわらかい音色に魅かれ、帰国後の9歳のとき、習い始めました。ハープの先生は少ないため、仙台に住んでいたときは東京のオーストリア人の先生のところまで新幹線で通ったりと苦労しましたが、やり始めたらとことん成果が出るまでやらないと気がすまない性格なので、続けることができたのでしょうね。先生の期待に応えたい、という思いもありました。ハープは40キロぐらいあるとても重い楽器ですが、肩にもたせかけて弾くと自分と一体になれる感じがする躍動感のあるところが一番の魅力です」

—ハープの活動歴は。

「9歳で始めたあと、10歳、12歳のとき、国内のコンクールで準優勝、優勝、16歳のときには海外のコンクールで3位となりました。16歳でプロとしてデビューアルバムを発売、その後は毎年アルバムを発表しました。ハープ奏者の女子医学生というのが珍しかったのか、『ニュースステーション』や「徹子の部屋」などテレビ番組にも出る機会に恵まれました。NHKワールドの音楽番組で、全編英語のビデオジョッキーを務めたこともあります。そのほか、パイヤール室内管弦楽団とフランスでレコーディングさせて頂きました」

—ハープと医師の仕事の「二兎」を追うことを決めた理由は。

「とても自然な選択でした。二兎を追おうと決断したわけではなく、物心ついたときから自分の一部だったハープを続けたいという思いと、ずっと興味を持っていた医学を勉強したいという気持ちが一緒になったという感覚です。医学生時代も1日に2～3時間はハープの練習をしていました。くたくたで帰ってきたあとにさらにハープの練習というのは体力的な挑戦ではありましたが、皆さんの応援にも支えられ、何とか続けることができました」

「学生時代はもっと勉強に時間を割きたいときに、机から体を引きはがすようにしてハープに向かうことが多かったので、今はその反動で思い切り勉強に時間を費やしたいという気持ちがあります。その均衡がとれたときに、今までよりもっといい音色でハープを鳴らすことが出来たらいいなと思っています」

JCAW Copyright © 2012 All Rights Reserved.
会報内すべてのコンテンツの無断転用を禁じます。